

原 著

消化器外科医の術後合併症, 特に術後癒着・ 癒着防止材の使用に関する意識調査

渡 會 伸 治, 田 中 邦 哉, 秋 山 浩 利,
市 川 靖 史, 遠 藤 格, 嶋 田 紘

横浜市立大学医学部消化器病態外科

要 旨: 患者が最も嫌う合併症・後遺症として癒着性腸閉塞があげられる。今回, 主に神奈川県内の消化器・一般外科医139名を対象に, 術後合併症の中でも術後癒着に関する意識調査を実施した。

術後合併症のうち, 術後癒着・腸閉塞は縫合不全, 術後出血, SSI について4番目に重視している事象であった。術後癒着のリスクが高いと思われる開腹手術として, 腸管癒着剥離術, 結腸・直腸切除術, 直腸切断術など下部消化管関連手術が多くを占めていた。癒着について約60%の医師が極力防ぎたいと答えたが, 残り40%は生理的な現象であるため腸閉塞が起こらなければ仕方がないと答えていた。また, 術後合併症予防の対策としては, 早期離床の促進のほか, 合成吸収糸の使用, 抗生物質の予防的投与, ドレーン・カテーテルの早期抜去などの SSI 対策を特に重視していたが, 術後癒着・腸閉塞対策として癒着防止材の使用も重視されていた。

癒着防止材の使用状況は, 症例を選んでの使用を含めると80%近く, 多くの外科医に使用されていた。使用症例を限定する理由として, コストの問題, 禁忌症例, 使い勝手が悪いなどがあった。癒着防止材の使用部位として腹壁の切開創下が約70%と最も多く, 次いで腸管受動後の後腹膜や骨盤底等の腹膜損傷部に使用されていた。

癒着防止材は, 癒着性腸閉塞の防止と再手術時の癒着剥離操作とリスクの軽減の両方を目的として使用されており, その効果として, 約80%の医師が有効性を感じていると回答し, 本剤の有用性が認識されていると考えられた。

Key words: 癒着, 癒着防止材, 術後合併症

adhesions, adhesion-preventing materials, postoperative complications